

構成的グループ・エンカウンターによる 体験的学習を基礎にしたグループ活動促進スキルの獲得

三 川 俊 樹 (人間学部心理学科)

1 課題意識と目的

最近、学校教育においてはさまざまなサポーターが必要とされ、ボランティア学生の積極的な参加が期待されている。学校不適応を示す児童・生徒への適応指導、不登校の心理的支援、学習面において課題をもつ子どもへの学習支援のほか、総合的な学習の時間や特別活動においても、その指導や支援にボランティア学生がサポーターとして関与し、その成果を挙げており、大学の「地域支援」の重要な一翼を担っているものと評価できる。

このような活動には、傾聴と共感を特徴とするカウンセリング・マインドだけでなく、グループをまとめ人間関係を活性化させて、自己理解や人間関係づくりを促進する知識と技能が不可欠であり、その力量を高めるための指導が体系的に行なわれる必要がある。

さて、構成的グループ・エンカウンターは、集団学習体験を通して、リレーションづくりと自己発見による行動の変容と人間的な自己成長をねらったもので、人間関係を基礎としたさまざまな日常的な教育場面での応用が可能であり、自己理解や他者理解、積極的傾聴、共感的な自己主張、他者との感情交流や適切な自己開示、対人関係やコミュニケーションのスキル、意思決定能力のほか、ボランティア志向などが高まることが期待されている(片野, 1996)。継続的な授業と集中実習による構成的グループ・エンカウンターの体験的学習を展開することによって、学生自身の人間的成長を促進することができるだけでなく、人間関係・グループ活動促進のスキルをもった地域支援(教育ボランティア)の人材としての資質を高め、将来は学校教育における専門家(教師やスクールカウンセラー)として、児童・生徒や学校を支援しうる能力の基礎の形成にも寄与することができると思われる。

以下には、「構成的グループ・エンカウンターによる体験的学習を基礎にしたグループ活動促進スキルの獲得」をテーマに、学内外での授業や集中実習を通じた体験的・自己開発的な学習を行なうことを目標にして、これまでも3・4年次のゼミナール、すなわち「特論演習1・2(教育・発達系)C」「卒業演習1・2(教育・発達系)C」を中心に展開してきた実践を報告する。このような実践は、1994年以来、10年にわたって修正や改善を加えつつ、継続・発展させてきたものである。

2 教育実践の内容

(1) 授業における体験的学習の展開

3年次の春学期「特論演習1（教育・発達系）C」では、構成的グループ・エンカウンターを取り入れ、自己開示、自己・他者・人間関係への気づき、共感的理解を促進するワークやエクササイズを盛り込んで、その体験をシェアリングし、これをレポートにまとめて提出させた。さらに、傾聴の技法を用いて、将来の研究テーマにつながる問題意識をお互いに聞き取って明確にしつつ、その内容を文章化したものを相互に点検し、レポートにまとめて発表するなど、体験を共有し、シェアリングが行なえるよう配慮しつつ進めた。また、秋学期の「特論演習2（教育・発達系）C」では、問題意識によって複数のグループに分かれ、質問紙調査法によって、調査用紙の構成、データ収集、統計的処理、考察の進め方などのリサーチの方法を習得することをめざした。グループでの討議や共同作業のほか、データ処理の方法についても互いに教え合い、レポートにまとめていく。この一連の過程は、カウンセリングのリサーチの方法を習得させることを目的とはしているが、「人間関係づくり」の継続でもあり、問題意識の共有、アンケート用紙の作成やデータ処理における共同作業、結果のまとめ方や考察に関する討議などは、すでに獲得したコミュニケーション・スキルが基礎となっており、自己開示や他者受容、共感的理解を体験する中で、さらに人間関係が深まっていくことがその成果である。

(2) 学外での合宿による体験的学習の展開

9月上旬に2泊3日の日程で合宿を実施し、構成的グループ・エンカウンターやカウンセリングの実技実習を行なった。また、卒業生の中から、これまでにメンタルサポート・ボランティアとしての活動経験を持ち、現在は教育相談員やスクールサポーター、臨床心理士や精神保健福祉士として活躍している人が4名、臨床心理学を専攻する大学院生が3名加わり、構成的グループ・エンカウンターファシリテーターとなったり、エクササイズやシェアリングのモデルとなって機能した。

体験的学習の内容としては、トラスト・ウォーク（目かくし歩き）、バック・トーク、フロント・トーク、頭をゆだねる、サークリングなどで、大学の授業では展開できない実習課題を集中的に実施し、シェアリング（分かち合い）をていねいに行なった。また、いくつかのグループにまとまって、エンカウンター的に自己開示とシェアリングが行なわれ、上級生や卒業生が各グループに入って、促進的な関わりを行っていた。

(3) メンタルサポート・ボランティアについての学習機会の提供

このように積み上げてきた体験学習を基礎に、メンタルサポート・ボランティアとして心得ておくべき枠組と基本的な態度の形成をめざして研修を行なった。12月15日には「メンタル・サ

構成的グループ・エンカウンターによる体験的学習を基礎にしたグループ活動促進スキルの獲得

ポーターとしてのスキル」と題して、卒業生のHさん（教育相談員・スクールカウンセラー/学校心理士・臨床心理士）に、12月22日には「ボランティア活動のための心得と配慮」をテーマに、卒業生のMさん（中学校スクールサポーター）に、それぞれの実践活動からの提案や、メンタルサポート・ボランティアの指導に携わった経験に基づいて助言してもらった。その後、質疑応答をふまえてレポートをまとめた。

3 教育実践の成果

実際にメンタルサポート・ボランティア活動に携わり、特定の教育機関(学校や教育センター)において比較的長期にわたって活動を継続している学生が、このような取り組みをどのように評価しているかを検討するために、自由記述によるアンケートを実施し、その回答を表にまとめた。なお、すでに体験型学習報告会においてこれまでのメンタルサポート・ボランティア活動の実践報告を行なった2名の学生は、このアンケートの対象とはしなかったため、8名の回答が検討された。

表1 メンタルサポート・ボランティア活動の機関とその内容

K市教育総合センター（発達障害児の保育）	3年女子A
T市A小学校（不登校児童への対応）	3年女子B / 3年女子C
H市B小学校（相談室での対応および授業・学習支援）	3年男子A
I市C小学校（学級でやや問題のある児童への対応）	3年女子D
M市A中学校（不登校の生徒への対応および授業・学習支援）	4年男子A / 3年男子B / 3年女子E

表2 体験的学習のメンタルサポート・ボランティア活動への効果

【構成的グループ・エンカウンターの実験による効果】

・4年男子A：M市A中学校（不登校の生徒への対応および授業・学習支援）

ゼミで行なったSGE（構成的グループ・エンカウンター）などの経験が、ボランティア場面で活着していると感じました。エンカウンターによって得られた自己理解によって、子どもとの関わり方について、自分がどうすることが一番自然でベストであるかを考えることができ、また他者の存在を強く意識することによって、自分の感情や欲求から行動するのではなく、子どもたちが望んでいること、子どもたちにとって一番望ましいことを、第一に考えて行動しようとする態

度が身についたのではないかと思います。

・3年女子E：M市A中学校（不登校の生徒への対応および授業・学習支援）

生徒と話す時の基本や姿勢は、やはりゼミのワークの中で身につけることができた人との接し方に習ったものであると思います。傾聴、特にうなづくという行為は、話している相手を本当に安心させ、その相手が自分を表現できるように促す要因の一つであると実感しました。この実感がつかめてからは、「ニコニコして話を聞いてくれるお姉さん」というキャラクターが徐々に身についていき、生徒との距離の取り方もコツがつかめてきました。

・3年女子A：K市教育総合センター（発達障害児の保育）

ゼミでは自分を自己開示し、相手との距離を縮めていくことを学びました。相手のことを知りたいなら、まずは自分のことを知ってもらうことが大切だということを実感して、ボランティア活動に挑みました。自分自身に壁を作らず、積極的に子どもと接してみました。すると、子どもも自然に近付いて来てくれて、はじめてあった子ども達ともすぐに仲良くなれました。ゼミで学んだ構成的グループ・エンカウンターが役に立ったのではないかと思います。

【基本的なカウンセリング技法の習得による効果】

・3年女子D：I市C小学校（学級でやや問題のある児童への対応）

私は、ゼミや授業で傾聴の仕方やおウム返しなどの技法を学び、ロールプレイをしていたおかげで、それを意識しながらありのままを受け止めてあげる姿勢を保つことができています。学校心理学で学んだことを思い出しながら、一つ一つの言動の裏に隠されたメッセージを考え、少しでも読み取ることができていると思います。今後も、ゼミや授業などで学んだことを活かして、その子と向き合っていきたいと思います。

・4年男子A：M市A中学校（不登校の生徒への対応および授業・学習支援）

子どもたちと接する中で多くのことを学びましたが、大学やゼミで身につけた知識や技法がとても役に立ち、重要であったと思います。その中の一つとして、「相手の話を聴く」ための態度や技法、これがとても大切なものだと感じました。子どもたちが話しかけてくる時、多くは他愛のない世間話や身の上話ですが、そういったことの一つ一つをしっかりと聴き、理解し、そして自分が理解したことを相手に伝え返すことで、ただ漫然と相づちを返すよりも、「自分の話をきちんと聞いてくれる相手」として、子どもたちとも接しやすくなり、関わりがスムーズに行われるように感じました。このようにゼミで学んだ多くのことが、学生ボランティアとして活動するにあたって、大きく活かされていたのだと、今までの活動を振り返って強く思います。

【メンタルサポート・ボランティアに関する学習機会の影響】

- ・ 3年男子A：H市B小学校（相談室での対応および授業・学習支援）

ゼミの卒業生で、教育センターに勤めている先輩、中学校で常駐のスクールサポーターをされている先輩による特別講義の中で、ボランティアとしての心構えや倫理のみならず、実際に子どもと関わる上でのスキルなどのお話を聞けて、それらのことはボランティア活動をする上で、直接役立った。他にもゼミの講義中だけではないが、三川先生のお話、ゼミのコンパに来て下さった卒業生の先輩方のお話の中から、ボランティア活動上の、さらにその先の自分の展望に関して、非常に多くの細かなものから大きなものまで、指針を得ることができた。

- ・ 3年女子E：M市A中学校（不登校の生徒への対応および授業・学習支援）

前々回のHさんの話からは、枠組みを守るという大切な決まり事を再確認でき、ボランティア活動の厳しい面を教えられたと思います。「遅刻や欠席をしたり、途中でやめられたりするのが一番困ります」と話していた時には、ドキッとしました。これは学校をはじめ、アルバイトや会社などで当たり前の規則であるはずなのですが、今の私たちの年代でも守れない人がいるという事実を忠告されたような気がしました。

ボランティア活動はアルバイトと違って、ほとんどが無償です。アルバイトと同様に規則を守り、アルバイト以上にサービス精神やボランティア精神がないと続かないものであると思います。「自分のために」ではなく、「相手のために」という意識が必要不可欠であるとも思います。

前回のMさんの話を聞き、改めて「Mさんの下でボランティア活動をすることができて、本当に良かった」と心の底から思いました。生徒のことを第一に考え、アフターフォローは必ずするという姿勢からは、私がボランティア活動を続けていく上でとても参考になり、役に立つお手本です。OB・OGの先輩やお手本になる存在がいると、ボランティア活動にも慣れやすいと思います。そこから良い緊張感が生まれ、ミーティングなどを通してボランティア・メンバーとのコミュニケーションやボランティア・チームの連携を密にすることが重要だと教えられました。

【その他】

- ・ 3年女子B：T市A小学校（不登校児童への対応）

小学生と接していても、個を認め、自分の意見をおしつけないようにしている。

- ・ 3年女子C：T市A小学校（不登校児童への対応）

現代の子どもの状況の変化がすごく伝わってきました。ボランティアは自分自身の成長につながると思います。子ども達から学んだこともたくさんあります。純粹さがとても伝わってきます。最近サポートについている子どもが、少しずつ注意を聞いてくれるようになりました。

- ・ 3男子B：M市A中学校（不登校の生徒への対応および授業・学習支援）

三川先生の教育・発達系演習の授業が、私のボランティア活動を大いに後押ししています。授業の中で使用している石隈先生のテキストは、ボランティア活動の中での心持ちや考えなどが

[] 教育実践報告

確に記されていまして。今思うと、教育・発達系演習の授業を全て受け終わってから、ボランティアを始めることができれば、もっとよい始まりにできたのではないかとも思います。

【引用文献】

片野智治 1996 エンカウンターとは 國分康孝監修 岡田弘編集 エンカウンターで学級が変わる小学校編 グループ体験を生かした楽しい学級づくり 図書文化社, pp. 18-23.